

第2回ぶんぱくあり方検討会 議事要旨

1 開会

委員7名中6名出席

<藤野会長、五月女委員、佐久間委員、染川委員、吉成委員、河合委員>

関係機関：明石市立天文科学館、明石文化国際創生財団、明石市立文化博物館、政策局
SDGs 共創室市民とつながる課（谷内、永田）

事務局：市長、副市長、総合政策担当理事、市民生活局長、市民生活局文化・スポーツ
室長、市民生活局文化・スポーツ室歴史文化財担当

傍聴者6名

2 市長あいさつ

第2回ぶんぱくあり方検討会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。傍聴の方もたくさん来てくださっています、ありがとうございます。第1回で、皆さん方の活動やお話を聞かせていただいて、この博物館がどうあるべきかということをお考えさせていただきました。先日は佐久間委員に職員間の意見交換会をしていただいて、また新たな発見もたくさんありました。

明石の文化博物館は、第1回に「観光なのか市民のためなのか」というお話もありましたが、「市民が何度でも訪れたい施設」となり、博物館とつながることで、いろんな人やものの研究を通して新たなつながりが生まれるような、そういう博物館にしたいと改めて思ったところです。

文化博物館建設経緯についての資料にもありましたように、広義の文化をしっかり捉えて文化博物館が構想されたということがよくわかりましたので、できれば明石全体、縦軸の時間軸、明石市の土地としての横軸、そういうもの全てをミュージアムと捉えた時に拠点としての文化博物館のあり方など、大きな理想も含めて語っていただきたいと思えます。

前回もお話しましたが、予算も限りがありますが、まずは広く、夢のある皆さん方のご意見をいただけたらと思っております。変化してはいけないものと変化していかなくてはならないものもぜひ教えていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

3 報告

(1) 第1回検討会のまとめ・振り返り

(事務局より説明)

資料1「第1回ぶんぱくあり方検討会 意見交換まとめ(項目別)」

第1回検討会での、ぶんぱくのビジョンや方向性についての意見を項目別に整理した。

1. **全般** ・ぶんぱくがどういう状況なのか、来館者から見てどうなのか、それから、ここで働いている人たちからはどうなのか、といったファクトを集めていかないとベクトルが定まらない。
2. **概念** ・ぶんぱく設立経緯を見るのと同時に、文化概念を明確化していく必要がある。
3. **館の運営体制** ・博物館の基本機能を抑えることが大事。・見る人の興味を惹く展示をするために、どうやって資料収集を。調査研究をする機能をどれだけ持てるかが、やりたい展示が実現できるかどうかが鍵。
4. **使命、ビジョン** ・今ある資料、今ある活動、今あるユーザーというベースの上で未来を考えなくてはいけない。
5. **ワークショップ** ・オーディエンスリサーチで聞かないとわからない。知らないままでは展示は作れない。・ワークショップで、ターゲットとなる人たちから聞くのはすごくいい。・博物館に来ない人からどうやって意見を聞くかが難しい。
6. **コーディネート機能、ハブ機能** ・文化博物館はハコモノとしてここに来れば展覧会を見られるということではなく、もっとコーディネート機能があればいいと思う。・ぶんぱくだけをどうにかするのではなく、天文科学館や図書館と一緒に連合体としてやっていけるような機能が持てたらいいと思う。
7. **連携** ・天文科学館を参考にしながら、いろいろやっていくと面白い。・企業と連携した展示も良いのではないかな。
8. **次世代育成** ・次世代の育成が大事。・子どもたちが文化博物館に行くことを、展覧会に行くことではなく、文化博物館に足を運ぶことが楽しみになる機能があれば、次世代への影響が変わってくる。
9. **展示** ・既存の展示やこれまでの特別展示にとらわれない側面にもう少し光を当てていけるといい。・外国の人たちにどう関わってもらうかも重要である。・委員はそれぞれ博物館関係につながりを持っている人がいるので、展示をどうするかを展示業者や博物館関係者に今の展示を見てもらってアイデアを出してもらってワークショップを開いたり、必要な関係者につなぐこともできる。

資料2「ぶんぱく建設の経緯について」

建設当時の在籍職員への聞き取りとの過去の公文書の調査よりわかったことを報告。

- ・文化財の適切な保存・公開、郷土の学習・研究の場として
- ・明石城に関する展示施設として
- ・市政70周年（1989年）を迎える明石市の目玉事業として
新長期総合計画（1981年策定）に郷土資料館の建設が明記されている。

1.（仮称）明石市立郷土資料館建設についての考え方（1988（昭和63）年（仮称）

明石市立郷土資料館に係る、建設、展示計画)

「市民福祉・文化創造都市」明石市が目指す「文化」は、人間のいとなみ全体を包括した広義の「文化」を標ぼうしている。

(仮称)郷土資料館はその考えをもとに、「21世紀の明石の文化創造」をになう核となり、文化創造の発信基地となる施設でなければならない。

当該施設は、緑と海の見える魅力ある都市空間に、自然と調和したうるおいとやすらぎのある施設として、市民が郷土明石の生いたちに想いをはせ、自主的な学習と創造活動を通して、郷土愛とゆたかな心を醸成する場として建設する。

2. 施設の内容(1) 施設の機能

人類が誕生以来営々といとなんできた人間の生活、文化、特に郷土明石の貴重な文化財に関する調査、研究を行う。

本施設では、市民の文化創造活動の場として、美術展、芸術祭等市民創作活動の発表の場として本格的なギャラリーを設け、市民文化の高揚を図る。当施設は市民の知的探究心、知的好奇心に応え、文化についての理解を深める機会としたい。

館のネーミングについて

(仮称)郷土資料館のネーミングの検討にかかる会議(1990(平成2)年)

「(仮称)郷土資料館」という名称は、議会等により文化施設にふさわしいネーミングを検討されたいとの意見・要望を受け、全国の博物館・資料館等の名称を参考に検討。

施設目的が「市民が郷土明石の生いがちに想いをはせ、自主的活動と創造活動を通して郷土愛とゆたかな心を醸成する場である」こと、施設機能が、1階部門は歴史、民族、考古を中心として展示部門であること、2階部門はギャラリーを中心に市民の文化創造活動の場であること、を踏まえ検討した名称(案)として5つの案が出されている。

歴史文化(会)館、郷土文化(会)館、文化博物館、郷土博物館、文化資料館

その後、これら5つについて協議がなされた(3 協議結果)。

(1) 当施設の目的及び機能としては、歴史関係の展示と市民文化創造の場であるという観点から、施設名称としては「歴史」「文化」という用語は欠かせないのではないか。

(2) 「資料館」という用語はイメージ的に「倉庫」の意味合いが強いので、「館」又は「会館」の方がベターではないか。

(3) 郷土という用語は、響きとしては大変狭隘的に聞こえるが、一面親しみやすい面もあるのではないか。

(4) 「博物館」という用語は、規模的にも大きく、内容的にも専門的であるというイメージが強いが、他市町においてもかなり使用されていること、また、展示監修会議の意向もそうであることから、それでいいのではないか。

結果、5つの候補より、歴史文化（会）館、郷土文化（会）館、文化博物館、郷土博物館の4つに絞られた後に、市長、助役、教育長に報告し、検討を仰ぐことに決定した。その後の経緯は不明だが、1991（平成3）年にオープンした際の組織体制で文化博物館となっている。

資料説明

資料3 ぶんぱく学芸担当者の専門、経歴、担当業務、これまでぶんぱくで開催した展覧会（ジャンル別）

資料4 ぶんぱく関係者

委員意見

（委員A）

- ・かなり早い1988年に「文化創造都市」という言葉を使って大きなことを考えていたことがわかる。
- ・館の役割として、「郷土資料館」と「文化創造の発信基地」の2つの役割の間で30年以上運営されてきた。今にふさわしいミッションが必要だろう。

（委員B）

- ・明石市の社会教育施設の全体図を確認したい。公民館、コミュニティセンターとぶんぱくとの関わりはどうなっているか。博物館機能と公民館機能や図書館機能が一体となって整備されているケースがあるので、確認したい。また、ネーミングの経緯から、ぶんぱくは当初よりコミュニティセンター機能を併せ持っていたのかとも想像するが、どうか。
- 昭和40年代に中央公民館、昭和50年くらいから中学校・小学校にコミセン（コミュニティセンター）が順次整備されてきた。平成14年に中央公民館は廃止され、生涯学習センターができ、生涯学習施設となり、社会教育施設ではなくなった。現在、小学校区コミセンは地域のまちづくりの拠点、中学校区コミセンは生涯学習拠点となっている。平成3年の博物館開館から10年間ほどは、中央公民館とぶんぱくは併設されており、役割は分離されていた。

(2) ぶんぱく職員意見交換会について(資料5 ぶんぱく職員意見交換会)

(事務局：意見交換会の主旨・方法を説明)

「ぶんぱくあり方検討会」で3年後のぶんぱくがどうあるのがよいかを検討しているが、その結果を実際に実現するのは博物館で働いている職員であり、職員がぶんぱくがどうなったらいいと考えているかを確認するために意見交換会を開催した。

ステップ1として、ぶんぱくが目指すこと、アウトカムを考えるため、ぶんぱくがどのような状態になれば、設置条例の設置目的が達成できていると思うか、意見を出した。

①「ぶんぱくが市民にとって身近な存在になる」、②「子どもたちが明石の歴史や文化を理解し、自発的に知ろう、学ぼうとする」、③「職員が誇りを持ってはたらける環境が整う」の3つの意見が出た。3つの意見について、グループに分かれて、具体的にどのようになればそういう状態になるかを考えて、意見を出し合った。その結果を壁に貼ってある模造紙と、「資料5」の「step1」「step2」に記載している。

(委員Bより報告)

・朝9時から12時までの3時間で、参加者が意見を出して、整理していく方法で実施し、ここまでの意見が出た。

・まず、条例上の設置目的(「歴史、民俗等に対する市民の理解を深めるとともに、市民の文化の向上及び振興に資するため、本市に文化博物館を設置する」が「誰がどんな状態になったら達成できていると思うか」を書いていった。それぞれ、自分たちが達成したいことをきちんと持っており、次々と考えが出てきた。

・次に、「それに関連する今やっている事業、あるいは今やれていない事業がどんなことか」を考えた。この目的のためにこの事業をやっているという関連付けができるかどうかということで、この目的のグループ分けも参加者が整理をした。ファシリテーターがやったわけではない。職員の皆さんが、どういう目的の体系があるのか、あるいはどういう事業の体系があるかを、自分たちで意見を出し合いながら整理した。

・その後、「それを実際に進めていくために、どういう課題があるか、何が障害になっているか、どうしたらできるか」をグループで討論した。結果を見ると、たくさんの意見が出ていることがわかる。

・職員対象のこのような会をする場合はどこまで意見が出るかと不安に思う。ここには市の学芸員、指定管理、総務系の職員もいる。立場が違い、年限が切られている立場の方が多い。そうすると、この職場の10年後、15年後の未来を描くことは難しいが、「こうなってほしい。こうやっていきたいんだ」という思いがするすると出てきたのは、私たちが当初恐れていたこととは違う結果だった。たくさんの意見が出て、この職場をどうしていきたいんだという熱意がしっかりと感じられた職員の意見交換会だった。発表、意見のビルドアップ、意見の整理も、職員の皆さんが、立場の違い、職階の違い関係なくまとめていった。話し合いも非常にうまくできる状況にある。

・この意見交換会を経験して、職員に当事者なんだと、意見を出せる、出していかなくてはいけないんだ、自分たちの意見が大事なんだという意識をある程度持っていただきたい。職員は集められて、ぶんぱくの今後のことを考えろと言われても、どういうことが求められているのか、ちょっと不安な感じだった。最初は緊張していたが、自分たちのやりたいことを出せばいい、となった途端、意見を出すのが加速していった。

・立場の違い、指定管理者、市、いろんな部門がわかれてしまっていることがあるのだろう、初めてこうした意見交換をして思っていることを話せた、あるいは聞けたという声がたくさんあった。そして、それが楽しかったという声が多かったのが非常に印象的だった。彼らは改善の機会を求めている、ただ、それを実際に形にできる場がないというのが現状と思う。

・出てきた意見で目立つのは「子ども」「身近」という存在だ。彼らはこの博物館がもっとメジャーになって、明石市民に親しまれるものになってほしいという思いをすごく強く持っていると感じる。

・一方で、研究に関わるテーマで出てきたものは少なかった。紀要をちゃんと作っていかなくちゃいけない、きちんと誇りを持って研究を進めていきたい、という意見も出てくることはすごく大事なこと。このような職員での議論は、大阪市立自然史博物館でもよくやっているが、そこでも研究に関することはあまり出てこない。しかし、学芸員だけで議論して、研究に関するキーワードが出ると、堰を切ったように意見が出てくる。外に向かって何かもっと新しいことをやっていきたいという時にはそちらに意識が向いてしまうので、インサイドワークになるような研究や資料整理は大事と思っても言葉として出てきにくい傾向がある。なので、後でもう1回ヒアリングをするなどで補っていかねばならない要素だと思う。ここに意見が出ていないから、意識が低いというわけではないと思っている。

・こういう会は下手をすると愚痴大会になってしまうが、ポジティブなワードがバンバンと出てきている。雇用体制をちゃんとしなくちゃいけないという切実な話、将来に向けての話も出てきているが、やりたいこと、やるべきことがたくさん出てきている。そして、スムーズなリーダーシップが、皆さんの中から代わる代わる出てきていた。

・言葉の端々に「天文科学館は」と、ワークモデルとしての天文科学館の名前が出てくる。身近にロールモデルがあることは大変重要で、今は組織として天文科学館とは切り離されているが、身近に助言を受けたり、一緒に協働できる形になっていくことで、彼らは自助的に変えていける可能性を感じている。

・職種が異なる立場でも意見交換に可能性を見いだしたことは、今後につながる要素と思う。

意見交換（職員意見交換会）

（委員A）

・職員の属性がいろいろで、任期付の職員にも関わらず、比較的中長期的な展望を持って語った人が多かったことにすごく驚いた。私が最初に思っていたこととずいぶん違うという印象を持った。

・20年30年後を見越した教育をしなくてはいけない点で、文化施設の運営と大学の経営が似ているところがあると感じている。その時々に応じて専門性や職員を入れ替える必要がある。

・ぶんぱくでは、学芸員の専門性が固定されている印象があるが、これからの博物館のあり方を考えるなかで、それにふさわしい専門性を持つ学芸員の配置も必要になるのではないか。

(委員C)

・あり方を考えるという大きな、これからの考えることをやっているところからすると、新たな時代の設置目的、あるいはそれに応じたミッション、使命をしっかりと作っていき、それに応じて意見交換をするという作業の必要性を感じた。

(委員D)

・現場で直面している方々が何をやりたいのか、どう思っているのかが一番大事なところだと思うので、こういう形で今回話ができしたのはよかったと思うが、参加した委員Bの感覚と現実がまだ相当離れている感じする。その間を何でつなぐのか。

・長年手を入れない状態で職員は博物館を運営してきた。今回の意見交換会で出た意見は自分たちのことでもあるので、まとめてみるというところまで、やらなければいけないんじゃないか？とすごく思う。今回の報告内容は、ここで話し合いをするためには弱すぎると思うので、この先を自分たちでまとめてみる必要があるで、それは僕も聞きたいし、どういう風に皆さんが垣根を越えて共通にまとめたものとしてどこまで作れるのかをまず見たい。1回やったからには、という感じがすごくする。

(委員E)

・よくある意見がやっぱり出てきたと思う。ここからじゃあ何がしたいのか、本当はこうやりたいんだというところがもうちょっと出せるように、次のステップで個々の胸の内、こういう固い場じゃなくても、ちゃんとその自分の気持ちをこう出せるような議論が次で期待できたらいい。

(委員F)

・前回、課題として出てきたことを早速この意見交換会で取り上げているという流れが踏まえられていて、すごく幸先のいいスタートだと思う。

・意見交換会でたくさん意見が出てきたということは、雰囲気すごくいい状態にあり、上辺だけかもしれないが、そういう要素が気持ちとしてはあるはずなので、その後どうしていくのか気になる。あの意見交換会ではどうだったね、というのを、定例会議の時に順番に意見を言うとか、何らかの形で続けて、考えていって、意見を聞いているという態度をこっちから出したいし、参加者ももうちょっと考えないといけない

んだと思ってもらいたいので、それ（継続すること）がすごく大事。

（委員B）

・ミッションについては第1回でも話題に出した。条例にとらわれずに、どういうぶんぱくであるべきか考えてほしいというオーダーもあったが、どういう議論になるかわからない職員の段階で、ミッションの話をいきなりやるのは無理だと思い、今の条例をベースにして、今実際にやっている、現場の人間としての感覚をまずは聞いてみた。

・条例がベースなので、文化というものがぼやっとしているところがあって、文化博物館の守備範囲がちょっとぼやっとしている。でも、広く地域総合博物館みたいな感じになるのか、専門の博物館になるのか、はちょっと考えないといけない、という意見が出ていた。これから我々も議論をしていく。現場、市民の方々、市長さん、皆さんの間でキャッチボールが回っていく中で、少しずつミッションが固まってくると思うので、まずは1回目のボール回しだと思って見ていただければと思う。

・意見交換会での議論が、実行段階にどうつながっていくかがすごく大事である

・市の学芸員がこういうことをやる、指定管理の学芸員がこういうことをやるというのが固定化して、協働作業になっていかないという特質があり、そういうところに課題がある。部署ごとの縦割りや、指定管理の契約に基づいて、ここまでのことをこなしてください、改善をしてください、ということは契約条項に盛り込まれていないから、改善できないのは指定管理制度特有の課題ではないか。

・組織改善の機会を仕組みとしてどう盛り込んでいくのかはこれからの課題で、現場任せではなく、我々のここでの議論、あるいは市長さんの方でお考えいただくことだと思う。その仕組みができた時に回す気があるかが、意見交換会で確かめることだった気がする。どんなに僕らがミッションを作ったとしても、自助的に現場が継続できるかどうかは現場の仕組み次第なので、そこをどういう風にしていくのかの、まず1回目の状況観測だったと思っていただければと思う。

・博物館には現有の資料があるため、過去を切り捨てることはできない。そのため、分野のある程度の継続性は博物館にとって大事になる。

・ぶんぱくのあり方を考えるうえで、歴史系が何人、美術系が何人という学芸員の分野よりも、市採用で、文化財担当が何人、市史担当が何人、指定管理が何人という部署ごとの縦割りが課題ではないかと感じた。

【本のまちビジョン検討委員会の報告】

ぶんぱくのビジョンや方向性について議論するにあたり、明石市で先行して実施している「本のまちビジョン検討委員会」について、会長として参加している委員Dより報告。

（委員Dより報告）

「本のまち明石の目指すイメージ」の1枚の紙を使って説明する。

「本のまち明石」は前々から言われており、「本とつながる」、「本からつながる」と書いてあるが、今までも蓄積がある。図書館として今までやってきたことは、「本とつながる」から始まり、いつでも、どこでも、誰でも、手を伸ばせば本に手が届くまちを作ろうということで、ブックスポット、図書館以外にも本に触れられる場所をできるだけ増やしていくという方向で図書館行政が行われてきた。今年この「本のまちビジョン検討委員会」では、これまでの図書館行政を第一段階とすれば第二段階を、モノとしての本をいろいろな形で目にする場所はまちなかにできたが、それだけではなく、そこからまた始まる、広がるものがまちの中にどういう形で作られていくのかということをお話している。例えば、本には磁力みたいなものがある、人と人を、人と知識をつなげることもある。いろいろなものをつないでいくものとして本があるので、本からつながることをテーマにしている。

パブリック空間を作っている民間、行政、いろんなセクターの人たちが緩やかにつながって、みんなが一つの大きな幕の中に入り、いろんな形でつながりやすい環境を作っていくことを目指して、「本のまちづくりビジョン」の委員会で作ってきた。途中段階で、この後パブコメで市民の皆さんに意見をいただくので、変わってくる場所もあるが、委員会としては大まかにこのような感じで考えている。

6つの四角で囲っている黒文字のところ、今までだと「本に親しみ、本が好きになる」のが図書館の目的だった。どれだけ貸し出したか、どれだけ読んでもらえるかが大きな指標であったが、そこにもっと関係的なもの、関係の質感みたいなもの、なかなか測るのは難しいが、「本に親しみに本が好きになる」だけではなく、そこには「知りたい情報が得られる」という、時代の変容と共に学校図書館が変わってきて、とそういうものも求められている。「楽しみながら本と人との魅力に触れられる」というところが、図書館や書店ではない、まちライブラリーとかいろんな形で、個人で開く場所。明石でも、公共の施設を含めて70カ所と最初伺ったが、もっと増えていると思う。そういう民間でやっている人たちのゆるやかなつながりが少しでき始めてきている。そこに、一番大元のあかし市民図書館と西部図書館、それに二見図書館と西明石の地域交流センターが来年以降できてくるので、その中でもっとももっとつないでいくことの中に、例えば右下には文化博物館、上には天文科学館も入っているが、先ほど発言にあった公民館的なものもこの中にどういうふうに関わってくるのかということも、本を一つのきっかけにしてゆるくつないでいこうとしている場所ということをお一つの図表で表していると思っ

ていただきたい。

図書館も本を貸し出すだけではなく、ここではコンセプトとしてリビング&ライブラリーという言い方をしているが、今まではライブラリーだけでよかった。そこにリビングが入ってくると、居場所であったり、空間が入ってくるので、そこも居やすい空間だったり、人が出入りしやすい場所だったり、そこから何かが発見される場所であったりということもありえるので、そういうところまで概念を広げながら本で人をつなぐということをこれから始めたいというところまで来ている。今年度にもう1回会があって、パブコメも入るので、公表は来年度になると思う。

このような取り組みは他市ではいくつかあるが、あまりない。活字文化という意味合いでは、出版社や老舗の書店の存在があるが、今まではあまり関係を持っていなかったもので、そこをつないでいって、明石市はさらに広げていこうというところに来ていると思う。

意見交換（本のまちビジョン）

（委員A）

・ソーシャルメディアが発達して、メディア的な公共性が新しいテーマになっている現代の流れの中で、もう一度活字文化、本に戻って新しい公共性を作ろうとしている明石の取組は非常におもしろい。

（委員C）

・公共という言葉が出てきたが、図書館も、博物館も、本当の意味でのパブリックというものの意味を考える必要がある。

・ニューヨーク公共図書館では、公共性という意味で、あらゆる人の情報へのアクセス権を保証しなくてはならないという観点から、インターネットのルーターを無償で提供する事業を展開し、成果をあげている。

デジタル化

（委員B）

・デジタルについて、本のまちビジョンの図には書かれておらず、フィジカルな本のまちをイメージしているように見える。それはあえてなのか？明石市がデジタルについてどう考えているのか。

・図書館はデジタルメディア的な展開をするのか？

・明石市には、デジタルな情報発信をまちとしてどうやっていきたいという構想はあるのか。

（委員D）

・今どのくらいデジタル化が進んでいるか、細かく把握していないが、一部はしていると思う。図は関係性を表しているのだから、フィジカルなところを出しているが、実際に情

報は水面下にもあるので、それもなおざりにはできない。非常に重要な要素ではあると思うが、そこまでなかなか現実では見えてこないところが多い。

(市長)

・デジタルは、どちらかというと遅れているところで、私が市長になってから説明させていただいているところでもある。本のまちビジョン検討会でも、デジタルをどうしていくか、委員の大学生からも提案が出ている。図の中には入っていないが、入っていくと思う。デジタル図書などのベーシックなものはあるが、例えば、岐阜のメディアコスモスさんが、委員Dが館長の時にやってこられた映像やメディア、そういう知の蓄積の中に入れていこうというのは、まだ明石では取り組めていなかったもので、参考にしてみたい。

4 議事

(1) ぶんぱくのビジョン・方向性について

意見交換

(委員A)

・市長挨拶にあったように、市民が何度でも訪れたいような博物館、次世代の若い人たちが、つながっていくような博物館、また、子どもたちの想像力や探求心を引き起こすような博物館、こういったことが重要と思う。職員の意見交換会からは、市民にとって身近であるということも、重要なポイントとして出てきた。

(委員B)

・図書館のビジョンは、まちに対して図書館がどう貢献できるのかという割と大きな視点で語られているように思う。図書館ができることは何なのかを明らかにしている。だから、明石というまちの市民の生活に、あるいは、まちのアイデンティティに、あるいはまちの未来のために、文化博物館がどういう風な貢献ができるのか、そのために文化博物館が何を持っているのかというところが起点にならないといけない。

・博物館にどのような資料があるかは職員が把握していて、職員が今どういうモードにあるかも垣間見えた。そこをベースに何ができるか？ということをやより精緻に組んでいかないといけない。その組むところはある程度現場に委ねて、もっと大きなビジョンのところをここで語っていくのか。

・委員が知らないことを検討会で勝手に組み上げていくのは難しい。

・明石でこの2020年代において、何が本当に必要なのか、何が足りていないのか、何が失われようとしているのか、というようなところを検討会で話せないで検討会で方向性は議論できないと思う。

・図書館におけるデジタル対応を明石市がどう考えているか、のように、博物館についても、明石市自身がどう考えて、リアルな地域の中での博物館のあり方を考えていくべきなのか、デジタルなところのレイヤーとダブルレイヤーで考えていかないといけないのか、どう考えればよいか迷いがある。

(委員D)

・博物館が持っている資源、デジタルになっているものもなっていないものも含めて、それがどれだけあるのかがわかると、図書館でも博物館でも広げることが出来て、領域が重なってくる。何があるかが見えないから、どうしたらいいかわからない。

・図書館と博物館とはすごく組みやすいところだと思う。岐阜でも博物館と一緒にやっており、お互いをどううまく使いこなしていくかは結構大事で、表現として使いこなしていくのか、歴史に肌身として分かりやすく触れるために、という意味では非常に重要な視点だと思う。

(委員C)

・図書館も博物館も、いかに情報を提供していくかが重要だと思う。何のためにこれを

やるのか、「本のまち明石の目指すイメージ」の目的はどこにあるのか。「知りたい情報を得られる」「チャレンジできる」といくつかのことは書かれてはいるが、さらにその先が知りたい。その先にどういうビジョンがあるのか。

・ニューヨーク公共図書館では、ルーターを提供し、低所得者層が世界中の情報にアクセスできるようになり、就職につながり、貧困層から脱していく。そこまでのビジョンを考えた上で施策を考える必要がある。じゃあ、博物館はどうあるべきか。

・図書館の情報の提供の仕方は市民に対して広げていくイメージ。我々が持っている情報、図書は市民の皆さんのものですよというイメージがある。博物館は図書館と違って、博物館が持っている資料は我々と博物館のものという視点がやや強めのような気がする。それをいかに本当の意味での市民のものに、パブリックにしていくのかが非常に重要。

・資料情報の公開、利用のように、社会的、経済的、あるいは文化的にいろいろ貢献していくことが必要かと思っている。

(委員A)

・全てフリーアクセス化、デジタル化してしまっているのかという問題もある。

(委員E)

・コロナ禍以降、学校では子どもが1人1台、タブレットを持つようになった。その影響か、勤めている学校では休み時間に運動場に子どもがいなくなった。が、図書室には子どもが集まる。本に触れるとか、実際に手に持って自分の目で確かめられる場所がすごく大事と思う。

・博物館も、デジタル空間の中でつながる意味はあると思うが、まちを構成している、まちの中にあるいろんなギャラリーとか公民館、コミュニティセンターなどを再認識して、再構築していくことが、本と一緒に、人と人が繋がることや、まちが人とつながっていくことになると思う。

・身近な存在になるというのがすごくキーポイントになる。例えば夏のクールスポットのように展覧会を見に行くだけでなく、涼みに行ける、何かの途中に立ち寄れる。そこで、何か新しい発見ができる。そういう場所が博物館の機能として、もっと重要になってほしい。

・天文科学館のように、そこに行けば何かワクワクするものに出会えるということを一つキーポイントに考えていけたらいい。

(委員A)

・「身近に」というと、リピーターになるかどうかだが、博物館ではリピーターになりにくいと思う。

(委員B)

・大阪市立自然史博物館はリピーターがとても多い。それは、展示施設内で教育プログラムをやっているから。展示を見てもらうために子どもワークショップをやって、子ど

もたちが今まで気がつかなかった角度からいろんなものを観察して、実はバックヤードにはこれと同じこんなものもあるよ、と資料を出してきて、と教育プログラムをやると、子どもたちはキャーキャー言う。

・リピーターを作ることは可能だが、それは自分のところの展示を自分が語れる状況になってからやることである。人のふんどしで語る教育プログラムは、面白くない。自分が調べてきたことという要素がちゃんと展示の中にあって、だからこそ掘り下げられる。

・私の博物館になってもらうとリピーターになる。自分たちの生涯学習でも社会教育でも、その成果を発表をする場に博物館がなくなっていくことによって、私の博物館になってくる。いろんな私の博物館のなり方があると思うが、そういうことでリピーターは作れると思う。それが多分職員さんたちの言っている身近という言葉につながるのではないかと思っている。

(委員D)

・博物館に行つてすごく思うのは人がいないということ。

・博物館には世間話や相談している人がおらず、有料スペースなので、私の場所ではないという拒否感がある。

・図書館には人がいる。図書館と比べるとは無謀だが、博物館には人がいなくて、おしゃべりができない。シーンとしている。入りたくない。

・博物館は無料スペースが小さくて、行こうと思わない。もっと広かったら行って宿題をするかもしれないけれど、そこが初めから気になっている。

(委員B)

・大阪市立自然史博物館には相談カウンターがあり、学芸員が常駐しておしゃべりしている。逆に、普通の図書館ではおしゃべりできない。

・博物館、美術館で、どのようにコミュニケーションができるのか？というところを開拓していかないと「私の博物館・美術館」にはならない。図書館も含めて、いろいろなコミュニケーションのコントロールは難しい。なので、コミュニケーションのガイドラインを作りながらいろいろやっている。威圧的なコミュニケーションや権威を振りかざすことがコミュニケーションではない、ということから。

(委員E)

・ぶんぱくの1階は全てオープンスペースでいいと思う。大人が子どもと一緒にいける場所として1階が認識されたら、何回か行くと思う。1階は遊びに行ける場所。南入口から北に出ることができる構造なのだから、それもメリットになる。

・布団太鼓、漁船を移動して、1階にレストラン、カフェ、ミュージアムショップを設置し、2階に展示スペースを増やして特別展をすればよい。

市民ワークショップのテーマ

(委員C)

- ・開館前のみえむ（三重県総合博物館）での取り組み（みえマイミュージアムプロジェクト）を短縮化したものはどうか。
- ・市民向けワークショップをやることによって、市民に博物館にまず目を向けてもらう、帰属意識を持ってもらうとか、それがあつたということに誇りに持ってもらうとか、それを使ってどうしていこうということを考えるきっかけを持ってもらうとか、そつちがすごく重要な気がする。いろいろな人たちに、市民に、まずは関わってもらつた、エンゲージしてもらつた、ということが重要と思う。

(委員F)

- ・三重県総合博物館の開館前の数年間は、知事ご自身の挨拶は5分もないのに、午後いっぱい参加して下さつたりもあり、注目を集める県民参加のプロセスを踏んだ。
- ・大切な来館者ターゲットである十代前半の人々と博物館について考えるティーンズプロジェクトに関わつた。博物館の基本的な機能をティーンが面白いと捉えてくれるアプローチで紹介し、例えば演劇表現で意見を発表してもらつたなど。冊子になつてるので、ご覧いただくことができる。
- ・ワークショップを今後も何度か開催されるなら、市民が何に興味関心を持っているかを上手く引き出す回があつても良いかもしれない。面白くてのめりこんだり、推し活など、様々な専門に入つていくきっかけは、とても単純な出会いだつたりする。魅力が凝縮している場面に直観的な出会いをすることがある。そうした興味関心の内容やその出会いの在り方を参加者が自身の経験の中から出し合つて行ける状況を工夫してみるとか。そこから、個人ではできない部分は何か、博物館と言う場でそれらを深めるにはどのような方向性があるか、そこで出てきたことを今後の博物館活動に繋ぎ合わせていけたら良いのではと思う。
- ・博物館だから資料があつてこう、という決めつけや従来のスタイルを超えて考えないと今の社会との乖離が生まれぬか心配する。いま、人々を突き動かすきっかけみたいなものと、そういうことに対応できる斬新さと従来の豊かさ（資料や知）を育み続ける博物館を、一緒に作り上げていける、みたいな…。そんな感じで館内外が絡み合えば良いと思う。

全体の予定・フレーム

(委員D)

- ・あり方検討会が進んでいくにつれて、いつまで進んでいくのかわかってくる。
- ・あり方検討会の進め方、前回中にいる人（職員）に聞いてみるが入り、外にいる市民の人たちのワークショップがあるというフレームが見えない。（市民向けワークショップについて）突然今聞かれているので、誰がどういう風に考えてそういうフレーム作っているのかがよくわからない。何を何回ぐらいやろうとしているのか、それをどういう風に考えているのかわからないと意見の言いようがない。

(事務局)

- ・あり方検討会を計画した時には、1年かけて5回程度の会議で、ビジョンや方向性、この文化博物館に必要な機能や役割を整理していく予定だったが、ビジョンや方向性はすぐにまとまるものではないので、予定していた5回よりも増えるだろう。
- ・検討過程で、委員から文化博物館で働いている人の意見を聞いた方がいいという意見があり、市民向けワークショップは当初から予定していて、第1回と第2回の間でできればよかったが、第2回と第3回の間になった。
- ・第2回でいただいた意見と、2月に行う市民向けワークショップの意見も踏まえて、第3回に向けて、さらに議論を深めていければと考えている。

(委員A)

- ・検討会の後のことが気になっている。検討会はタスクフォースなので、5回ぐらいやって、みなさんの自由な意見をもらって、意見分布まではまとめられると思うが、その後基本計画みたいなものに進んでいくのかどうか。
- ・ハードを含めた基本計画だと相当大きなものになるが、既存の資源を利活用する形だと基本計画というよりも管理運営計画のような形になると思う。そういった計画が次のステップとして、2年目とか、1年半後ぐらいに始まるかと思う。あり方検討会のアウトプットがどこまで行けばいいのか、私も理解していないところなので、市長から少しアイデアをいただければと思う。

(市長)

- ・現在の条例は、設立当時に1989年の市政70周年を迎える目玉事業として取り組んだ中で制定した条例なので、そこはしっかり踏襲しなければならない。一方で、今の時代に合うものに変えていかないといけないところもあるので、条例改正も見据えてご意見を賜ればと思っている。
- ・本のまちビジョン検討委員会でも、忌憚のない意見をたくさんいただき、市でまとめた。もう少し回数が増えるかと思っていたが、まとまってきたので、今年度中にビジョンが策定できる予定である。
- ・ぶんぱくあり方検討会の委員のみなさまには申し訳ないが、回数を決めるというよりは、しっかりと方向性が固まってきた中で、条例を改正して計画も大きく変えていった

方がいいなどの、ご示唆、ご意見を賜れたらと思っている。せっかく今までなかった、市民のための博物館にしていこうという新しい取り組みなので、回数を決めて性急に進めていくというよりは、しっかり議論を深めていただいた上で、私たちもそれをしっかり引き取らせていただきたい。

(副市長)

・まずは、理念とかビジョンとかそのあたりのお話をしていただいて。まだまだブレストを続けていただいてもいいと思う。その中で大きな目指すところが決まったところから詳細の部分を決めていけるのであれば、それでいいと思っている。

(市長)

・誰でも立ち寄れるとか、博物館が持っているものは市民のものなどキーワードはたくさん出ているので、今回いただいた様々なキーワードをこちらでまとめて次回お示ししたい。

・ぶんぱくを愛してくださってる方もたくさんいらっしゃるので、そういった市民の意見を皆さんに聞いていただき、引き取っていただいて、議論を深めていただけたらと思っている。

・まちを構成しているギャラリーやコミセンもそうだが、本のまちビジョンが本と繋がるだけでなく、本からどう繋がっていくかも一つのきっかけにしているように、ぶんぱくはそういった明石の中にあるまちを構成している施設とどうつながるのか、また、研究という側面で、知の蓄積をしてきた博物館の価値をどう高めていくのか、そういったことをワードとして出していただけたらありがたい。

・ぶんぱくに来る目的は展覧会だけでなく、子どもたちがいつでも遊びに来られたり、これ何やろうと思った時に合言葉がぶんぱくに行って聞いてみよう、みたいな、そういうことが自然に子どもたちから発せられる博物館であったり、いろんな切り口があると思うので、そういうキーワードをたくさん先生方の知見やご経験の中から出していただけたらと思っている。

(委員A)

・ビジョンや方向性を考えていくには、3重・4重ぐらいのレイヤー（階層）があると思う。

一番核になるのは、このぶんぱくの建物をどういうふうに生かしていくかということだ。

・博物館関連の施設が市内には天文科学館をはじめ、いくつかあるので、そういったところとどうネットワークを作っていくのか、その意味での文化的コモンズということになる。文化的コモンズは、文化施設に限ったことではなく、公民館や当然図書館も含まれる。文化ホールなども入ってくるので、芸術文化でジャンルの違うものと、どういう関係を作っていくのが3段階ぐらいのレイヤーかと思う。

・明石固有の様々な地域資源や外国人とどう結びついていくのか、そういった4段階目ぐらいのレイヤーがあって、どのレイヤーで基本構想、コンセプトを考えていくのが

重要と思う。

・サンプルとして東近江市博物館構想を紹介する。この構想を参考に、ぶんぱくを文化的コモンズの中心として、明石の様々な施設や営み、活動とつないでいくということを考えた時に、例えば「文化多様性と生物多様性を架橋した探求を通じて、持続可能な共生社会に貢献する未来の総合博物館」みたいなコンセプトもあると思う。

ワークショップ（２）

（委員B）

・委員Dが心配されているのは、ワークショップやタウンミーティングは運動としてすごく大事で、まちづくりを考える時に継続しなければということで、今回の職員向けヒアリングや意見交換会、市民とのワークショップが単発になるともったいないということを感じてお持ちだと思う。

・市民向けワークショップは、検討会で構想が出てきて、具体化しようという時に、もう一回本格的にやらなければいけない。

・今回の市民向けワークショップはブレストの市民版みたいになると思うが、「この文化博物館をどうしていったらいいですか？」と聞くとききおっしやっていたように、古い博物館をどうするのか、みたいな話になってしまうので、明石の文化とか、自然とか歴史とかそういったものを大切にまちづくりをするのに、どういった施設が欲しいですか？という広いところから、皆様のご意見をいただいた方が、いろんなアイデアが出てくるかもしれない。その中で、子どももわかるものでないとダメなんだよとか、歴史興味ないし、自然興味ないからまあ居心地がいい場所がほしいよ、とか。そういうことも出てくるかもしれない

・市民の意見とは別に、専門家が求める明石の博物館というものもあるので、それは検討会で補わないといけないところかもしれない。

・アイデアやキーワードのパーツをいろんなところから拾ってきて、みんなで作っていくことがすごく大事と思う。

・博物館をもっと使っていこうというプレイヤーを増やさない限り、いいアイデアは出ない。現場では、「ミュージアムプレイヤー養成講座」を企画している。現場の努力も紹介いただきたい。ユーザー開発みたいなのも大事で、傍聴の方や講座の参加者からのヒアリングもしたいと思っている。

（文化博物館長）

・「ミュージアムプレイヤー養成講座」を1月から始める。今、参加者を募集している。

・このような講座の参加者は高齢の方が多くなるのがよくある。大学のボランティアセンターや高校生にアプローチをかけ、今日、アートを通じて明石のまちと博物館をつなぐ起業をしたいという意欲を持つ高校生の応募があった。

・どういう活動を生み出していくかは、それぞれプレイヤーがイメージするものを形に

するお手伝いができればいいと思っている。博物館と全く関係のないことをしてもあまり意味がないと思ったので、まずはゆっくりじっくり博物館を、この博物館にどんな職員がいて、どんな専門性を持っていて、博物館はそもそもどういったことをしている機関なのかを知っていただくための講座を6回受けていただき、その後の1年で活動を生み出していただこうと考えている。

・今回初めての試みで、現在60人近いボランティアさんが館に所属しているが、高齢化と固定化により、ボランティアさんからも新しいボランティアを養成してほしいという意見を賜っていた。

(委員D)

・こういう、どういう問題意識が現場にあってということが聞きたい。それが見えないまま、あり方の検討はできない。

・現場の皆さんが思っていることの中に博物館の新しいイメージがあるので、それがあるとないとでは、全然議論の方向が変わってしまう。それがないままで私たちだけに(議論・検討が)委ねられるのは非常に嫌だなと思っている。

(委員C)

・私も同感で、こういうものが非常に重要である。世界的に見て、博物館は、ティーンがつく年齢から利用しなくなるので、そこにターゲットを絞っているのは非常に重要だ。

・若者に限らず、コアなファンは、コアであるがゆえに凝り固まったミュージアム像にのっとった提案をしがちだが、そこを意識しつつ、進めていければ非常に良い。

(委員A)

・ワークショップについてのアイデアはなかなかまとまらないが、キーワード的なものは出てきたと思う。2月2日のワークショップには私も参加したいので、委員の方で都合がいたら是非参加していただきたい。

・第3回あり方検討会は2月24日月曜日の14時からを予定している。そこでの議題、アジェンダはこれから事務局と相談をしていきたい。それ以降の日程は、また事務局から調整する。